

●ラポー ガエタン 特定准教授

Gáetan RAPPO (Associate Professor)

専門領域： 宗教学，日本史 (Religious Studies, Japanese History)

受入部局： 人文科学研究所 (Institute for Research in Humanities)

直前所属：名古屋大学 文学研究科附属人類文化遺産テキスト学研究センター
(Graduate School of Letters, Nagoya University)



密教の影響力軽視の背景 —異端と真言密教—

室町時代以降は、禪の存在感が増していくが、必ずしも密教文化が日本の宗教的世界や社会から姿を消したわけではない。実は、中世以降も、儀礼の力を信奉する権力者が、密教儀礼を司る宗教者と深い関係を持つ構図は、歴史上に何度も見られる。また、室町時代に存在感を増した禪も、密教を教理的にも政治的にもかなり意識していたことが、最近の研究で指摘された。江戸初期にも、徳川将軍の面前で繰り上げられた御前論議では、天台宗、真言宗の僧侶が活躍していた。にもかかわらず、中世後期以降の密教の存在感は、比較的に軽視されてきたと言える。

その背景にあるのは、中世後期から近世にかけて、宗派感が強化されていった、という宗教界の変容である。宗派を明確にし、継承していく過程で、各宗派の意義と重要性が、祖師の偉業に収斂され、宗派の差別化と権威付けが企図されると同時に、祖師を起点とする正統の後継者の系譜が形づくられていった。こうした正統の「正脈」が形成されることは、とりもおさず正統の潮流に入らない者を差別化し、「邪宗」や異端的な集団を意識していくことにもつながった。正統と異端は、表裏一体の関係にあり、異端的存在を構築することで、同時にその「異端」に毒されない、紛れもない正しい血脈が成立するのである。こうした異端的言説は、中世後期から現れ始め、十六～十七世紀に最も隆盛した。

文観のイメージと「立川流」言説の形成

この異端的言説の影響を如実に受けたのが、南北朝時代に活躍した文観房弘真である。網野善彦が、後醍醐天皇の創りあげた権威を「異形の王権」の術語で読み解いたことから分かるように、「異形」の密教儀礼に手をそめたという文観のイメージは、長らく流布し定着していたものだった。このイメージの発端は、1375年に執筆された宥快(1345-1416)の『宝鏡鈔』である。ここ

では、文観と邪教「立川流」の関連性を暗示するような言説が展開され、その後、この書を根拠に文観は、性的に倒錯した儀礼を行う邪教「立川流」の大成者と目されるようになっていく。実は、真福寺大須文庫で近年、文観筆の聖教が複数確認されたことにより、実際の文観の教理や儀礼の内容が明らかとなった。その結果、文観と「立川流」との関係性は、史実ではないことが実証的に証明された。しかし、史実とは反して、文観亡き後世の文献——例えば『立川聖教目録』、『謀書目録』など——において、文観が関わった書物だけでなく、文観に直接関連しない書物も、「立川流」という架空の範疇のもとに異端視されるようになった。やがて、対象が何であれ、「邪教」「異端」と目された場合、性的に倒錯した儀礼や教義など、「立川流」を想起させる定型表現による修辭が常套的に用いられるようになった。

真言密教に生まれたこの種の異端言説は、やがて浄土真宗など、日本の宗教界全体の異端像にも影響を及ぼし、例えば近世社会のキリスト教像にも影響を持ち、近代にもその残滓がみられる。しかし、恣意的に形成されてきた異端の系譜というものは、聖教資料が近年数多く再確認されるなかで、客観的に捉え直し、その偏見を解体の対象とすべきだろう。

デジタル・ヒューマニティーズと聖教

本研究は、デジタル・ヒューマニティーズのアプローチにより、こうした聖教資料の系譜を構築することを目的としている。京都という日本中世の宗教文献を調査するのに適した立地を活かし、出来るだけ多くの聖教資料を収集・翻刻し、データ化する。そのデータを元に、Nグラム解析を行い、科学的に異端の言説の具体的内容を抽出する。歴史的資料、特に日本中世の仏教漢文資料が、当該方法論の対象となった例はあまりなく、中国仏教漢文における方法論などを参照に、新たに方法を模索する必要がある。このアプローチによって、聖教研究の新天地を切り開いていきたい。

日本中世仏教文献(聖教)をめぐるデジタル・フィロロジー
日本密教史の再考試論

A Digital Philology of Buddhist Literature (Shōgyō) in Japan : Reassessing the Legacy of Esoteric Buddhism in the Late Middle Ages and Beyond

概要

日本中世密教のテキスト「^{しうきぎょう}聖教」は、仏教教理だけでなくそれを背景に展開する儀礼とその荘厳に関わる記録である。こうしたテキストに反映された儀礼の力の多様化と浸透は、平安時代以降影響力を増していった密教の存在感を示唆する。しかし、中世後期以降、宗派感覚が色濃くなっていった過程で、「正統」が形成される一方、一部の密教儀礼が「異端」視されていくことになった。そして密教自体が影響力を失い、その信仰は形骸化していったとみなされてきた。こうした言説を、従来の書誌学的手法に加え、デジタル・ヒューマニティーズの分析で検証し、密教文化の継承過程と軽視されがちなその後世への影響を見直す。

キーワード：日本中世密教、^{しょうぎょう}聖教、デジタル・ヒューマニティーズ、密教文化の継承過程、異端

方法論

